

貴州省麻江県の“跳馬”について

— 馬との関りで見えた豊饒・成育儀礼 —

伊藤 三朗[※]

目 次

はじめに	(49)
(1) 麻江と東家人	(52)
(2) 「一ヶ月の祝」	(54)
(3) “跳馬”	(55)
(4) 「対歌」	(59)
(5) 考察	(64)
(一) “跳馬”の特色	
(二) 古代的豊饒儀礼	
(三) 古代的共同体的紐帯	
(四) イニシエーション(加入儀礼)	
(五) エボナ女神信仰の痕跡	
(六) 芸能化しつつある儀礼	
(七) おわりに	
註	(69)

※中央民族学院高級進修生

はじめに

貴州省黔東南ミャオ（苗）族トン（侗）族自治州麻江県杏山鎮鳳山村のミャオ（苗）族（東家人）に伝わる“跳馬（ティアオ・マー）^{（註1）}”について報告する。

調査日は1993年1月29日（旧暦正月7日）で、当時貴州大学で少数民族の仮面劇「儺戲」を勉強中だった私が、春節期間中、黔東南各地の苗族の蘆笙舞を見て歩いている途中、偶然これを見ることができた。私が訪れた苗族の貴州大学々生陳芳氏の従兄、陸通涛氏の第一子（女子）の誕生満一ヶ月の祝い（当地では吃満月酒とよぶ。以下「一ヶ月の祝」と称す）に“跳馬”は行われていた。

「一ヶ月の祝」は①“跳馬”，②夜を徹して歌い合う「対歌」，③大勢の宴会，の三部からなり、これを二日間繰り返す。従って“跳馬”は成育儀礼の一部といえる。“跳馬”はまた、既婚婦人の二隊が田んぼの中で、藁で作った体長45センチ位の馬（写真1）を股に挟んで、歌を歌い合いながら踊るもの（写真2）で、性的な仕種もある。そういう意味で“跳馬”は豊饒儀礼のおもかげを残す。

馬は日常的には男の乗り物である。それを女性が藁馬にせよ騎乗姿で、しかも田んぼの中で踊る点に非日常性を感じた。そこで村人に“跳馬”の意味について再三質問したが、この豊饒儀礼のおもかげを残す成育儀礼について、村人は「一ヶ月の祝」の宴会を賑やかに祝うためのアトラクションを受け止めているだけであった。村人は「一ヶ月の祝」で一番重要なのは皆で賑やかにやることで、これが子どもの無事成長、子どもの母親への祝福、陸家及び村人への祝いとなるというのである。

このように村人は“跳馬”の非日常性を否定し、当然宗教職能者（巫師）の参加もなく、藁馬も使用後はゴミと一緒に捨てられていたが、一方、この「一ヶ月の祝」すべては女性だけでとりしきられ、男性は一切干渉しない女の祭であることも分った。“跳馬”と「対歌」は鳳山村の既婚婦人と、陸家の嫁（王徳菊さん）の実家の母親を頂点とする親戚側の婦人（未婚者は資格がない）の間で行われる。また、宴席に出る人も殆どが女性であった。

“跳馬”が馬、豊饒、女性の祭の三特色を持つ点に注意すべきである。すでに小島瓔禮氏らは比較民俗学の立場から、中国にも古代ケルト族の馬に乗る豊饒女神エポナの信仰が伝わり、中国を経て日本にまで達していると発表されている^{（註2）}。この信仰はユーラシア東西に伝わるという。東漸の途中、アルタイ族の馬の皮を剥ぎ天神への供物とする宗教儀礼と混交する形で、養蠶の由来物語が生れたのであろうという。しかしこれまで、中国の馬と関係を持つ豊饒儀礼の例は報告がなかった。中国には養蠶の神「馬頭娘」については研究報告があるが、馬を媒介とする豊饒女神信仰の研究は寡聞にして聞かないのである。

思うに今までの調査研究は主に漢族社会のものが多かった。反面、古代中国の面影を色濃く残す西南少数民族の文化には、その痕跡を留めたものが存在する可能性がある。そういうことを「儺戲」の勉強過程で痛感していたので、麻江以外にも“跳馬”は存在しないか捜してみた。



写真1 蕪馬



写真2 田んぼの中で蕪馬を股に挟み、花帽をかぶって踊る“跳馬”。



写真3 湘西土家跳馬隊の巫師



写真4 馬のはりぼてを吊して行進する弟子たち

貴州省麻江県の隣県、都勻（トウ・ユイン）県のブイ（布依）族は、結婚式の日「捧馬」にまたがって対歌形式で唱いながら踊る習俗を残している^(註3)。結婚式当日、花嫁一行が花婿の家に到着すると、門前に一脚の横長の木の腰掛（凳子）が置いてあって、花嫁一行は暫時花婿側親戚知人の祝福を受けることになる。この時、花嫁、花婿両家関係者2・3人～10人位が、杖などにまたがり、冗談を言い合って踊るもので、麻江の“跳馬”と同じ性的仕種、つまり棒にまたがった二人が相抱き合うのもあるという。観客がこの仕種を交尾の表現と理解している点も一致している。

実は貴州都勻に源を發する清水江は、麻江など黔東南州各地の少数民族の村々を結びつゝ、湖南省で沅水に合流する。従って古来、湖南西部（湘西）と貴州東部は、民族、經濟、文化各方面の結びつきが強い。1991年10月、湘西で開かれた中国儼戲学國際學術討論会でこの地方の関連習俗の紹介があった中に、「湘西古丈県土家跳馬隊」40人位の集團の行進もあった。馬上のトーチャ（土家）族の宗教職能者（巫師）を先頭に、大勢の弟子たちが旗を持ったり、跑旱船（パオハンチュアン）式の馬を身につけて行進した（写真3）。跑旱船とは陸上を行く船の意で、はりぼての船を身体にぶら下げて漕船の仕種で踊り歩くものだが、この場合は騎乗姿で舞い歩く（写真4）。古丈跳馬隊の説明には「願ほどき（還願）のお礼まいり、祖先への來福祈願を目的に行われる。内容としては、敬神許馬、操旗出馬、賀馬、跳馬等があり…燒馬も稀にある^(註4)」とあった。詳細は不明であるが、馬を媒介とした宗教儀礼であることは間違いない。地理的位置からいって、湘西古丈県土家族の跳馬と貴州麻江の苗族（東家人）の“跳馬”が結びつく可能性は高い。それらが、小島氏の指摘する、古代ケルト族の豊饒女神エポナ信仰の中国伝播の痕跡を留めるものか否か、今後さらに調査が必要と指摘しつつ、以下麻江の“跳馬”について詳論する。

（1）麻江と東家人

“跳馬”の儀礼を残していた貴州省麻江（県城）は貴陽市（省都）から東へ約100キロ位の所にあり、省都と黔東南及び黔南の各自治州を結ぶ公路の要衝にある^(図1)。清水江による水運も古くから開けていた。杏山鎮鳳山村は公路沿いの、近くに中学校もある戸数120戸ほどの農村で、村人の服装、生活ぶり等外観は、漢族農民と区別がつかない。なぜこのように開けた村に“跳馬”の習俗が残っていたのであろうか。

「一ヶ月の祝」を見て気づくのは、村の人がうちとけていて、互助精神に富んでいることである。「一ヶ月の祝」の準備は大へんである。親戚や村中の人に来て二日連続で行う宴会（「吃満月酒」とよばれる）の用意と後かたづけ。また“跳馬”や「対歌」の相手側は、祝いに來た陸家の嫁の実家の母親を中心とする親戚で、30人近くになる。この人達は陸家だけでは泊めきれない。鳳山村民が自家を宿として提供し、身内の人のように接待していた。一村民の慶事を村全体の慶事として祝う共同体の連帯がそこに見られる。このように村全体が陸家の嫁の実家の母親を賓客として扱う所を見ていると、漢民族の、男系で宗族的結びつきの強い家族制度とは異なる家族紐

帯を、鳳山村が継続させてきたことが分かる。「一ヶ月の祝」の費用も、700～800人民元かかるとのことで、その負担は大へんであるが、どの家も第一子の時は相当盛大にやるという。

鳳山村の人たちは新中国成立後の民族識別に対し、自分達を「東家族」という一民族として認定するよう主張したが、1982年、苗族の一部として識別されることになった^(註5)。民族識別時に示された彼らの連帯性の強さは、それなりの文化的理由があると思われるが、“跳馬”の儀礼が残されてきた基礎にはそういうものが存在するように思われる。

(2) 「一ヶ月の祝」

“跳馬”は苗族(東家人)が「吃満月酒」と呼ぶ「一ヶ月の祝」を構成する一部なので、これについて観察したところを記す。

(一) 日時決定

誕生満一ヶ月の祝いであるが、日どりは最低生後27日以降で、日柄の良い日が選ばれる。

(二) 「一ヶ月の祝」の通知と贈り物

誕生後、陸家ではあらかじめ吃満月酒が行われると親戚知人に伝えてあった。日時が決定し、通知を受けた人は殆ど出席の返事をし、陸家にあいさつに来た。一部の人はその時に祝いの品を持ってきた。宴会当日に持参する人もある。祝いの品は、①食品類一出産後の母親の滋養になるもの中心で、卵、米、生鶏(つぶして肉を食べる)等。②子どもの衣服類一服、帽子、布靴、ねんねこ等である。

祝いの品物を届けない人は、陸家の主人がどんなに出席を勧めても、宴席には出ないという。

(三) “跳馬”の準備

①藁馬及び紙帽子づくり、②踊り及び「対歌」の練習がある。①今回は藁馬10匹、帽子6個が作られた。藁馬の製作は、嫁の実家側の客人が到着する少し前に行われた。“跳馬”を踊る人が作り、製作及び稲の刈り取りに際しても、別に儀礼は行わない。使用後の藁馬も、一般のゴミとして扱われる。ただし藁馬の腹と口に赤い紙を巻くのは吉祥の印という。紙帽子は赤い紙で作って白い花をつけた縁なし帽で、客人側だけがかぶる。②踊りと歌の練習は開始直前まで行われていた。60才ぐらいの老婦人が指導して、左回り(時計の針と逆方向)で踊ったり、二人が肩に手をかけておじぎをし合う、いわゆる交尾を示す仕種の練習もしていた(写真5)。対歌は基本の型があるが、歌詞は即興なので、対歌に出る人は常々一緒に歌い合って歌詞を覚えるという。

(四) その他の準備

“跳馬”と対歌に出る人(同じ人が出演)以外の村の婦人が食事の準備と宴席の支度をしていた。“跳馬”「対歌」及びこれらの準備に従事する人は大変で、疲れもするが、他方村人からは尊敬されている。



写真5 抱き合う性的しぐさの練習

(3) “跳馬”

午後6時、薄暗くなった陸家の田んぼで“跳馬”が始まった。挨拶の後、藁馬5匹と紙帽子6個が相手側に渡され、「迎客歌」が鳳山村側の婦人によって唱われる。「迎客歌」の内容は①“跳馬”をこれから始める心情をのべ、②相手側を尊敬しもち上げ、③自分を謙遜するものが多い。陳芳氏が麻江方言を生かして漢訳した「迎客歌」とその訳を以下紹介する。“跳馬”の間中、「迎客歌」など各種の歌は、一つだけの曲(図2)で、田んぼの中でえんえんと歌われるのである。

迎客歌(1)

(主) 外婆^{※1}到来対門坡^{※2}

我在家中做帽子
我在家中做帽子
婆戴上望合没合。

(客) 我們来到対門寨

太^{※1}在家中做帽子
太在家中做帽子
外婆我戴好合心^{※3}。

(主) あなたが向いの村からおいでになる

家では“跳馬”の帽子づくり
皆さんの頭に合うかしら
心をこめて帽子づくり。

(客) わたしは来ました この村に

あなたは家で帽子づくり
心をこめた花帽子
私にぴったり うれしいわ。

麻江苗族（東家人）跳馬歌

貴川麻江



採譜者：柯琳（中央民族学院）

図 2

(主) 外婆来到对門村

我在家中印帽心^{※4}

我在家中印帽心

只怕好心没好心。

(主) あなたが向いの村からおいでになる

私は帽子に花飾り留める

心をこめて白い花つける

満足していただけると うれしいワ。

※1 「外婆」と「太」は相手の呼び方で、主人側は相手を「外婆」と呼び、客人側は「太」と呼ぶ。

※2 「对門坡」はこちらの村と同じ高さの所にある向い側の山村の意。对門寨、对門村と同じ。

※3 「合心」は満足する意。

※4 「印帽心」は“跳馬”に使う赤い紙帽子に白い花をつけること。

(客) 我們来到对門寨

太趕着印帽花

太趕着印帽花

外婆我戴真合法。

(客) わたしは来ました この村に

あなたは急いで 花をつける

心をこめた花帽子

私にぴったり 満足です。

(客) 頭年^{※5}太家過你寨

逗你太家請我来

(客) おととしも来た この村に

どうぞ又ねと さそわれて

去年我們來走路
今年拿馬接我們^{※6}。

(主)今年得馬大又多
我要迎接三萬客^{※7}
我要迎接三萬客
本是好馬接外婆。

※5「頭年」は一昨年の意。

※6この一句は、今年子どもが生まれておめでたいという意味を表わす。

※7「三萬客」は多くの客を意味する。

去年も来ました いそいそと
今年は 藁馬をもって お出迎え。

(主)今年はたくましい馬を手
私はたくさんの客を迎える
心をこめて迎えます
一番いい馬もって あなたを迎えます。

(客)我們來到你們村
石板好路來相迎
太在趕前我在後
再見^{※8}再見把手招。

(客)わたしは来ました この村へ
石板敷いて 道なおし
先導はあなた 手振るむら人
いらっしゃい いらっしゃい 大歓迎。

歌の進行と共に二隊は田んぼの中央に進み、持っていた藁馬を股にはさんで、向い合って歌の応酬を行い、歌いながら踊る。踊るといっても股にはさんだ藁馬を落とさないよう、上体と手を動かすだけだが、胸をそらすと、股にはさんだ藁馬の頭部（直径5寸位の稲の束）が男性のシンボルのように見える。主人側の中心的老婦人は細い杖を鞭のように振り上げて調子をとっている。

田んぼの周囲には多ぜいの観客が声援して賑やかである。ホイッスルをピーピー吹き鳴らす者、ぐるぐる駆け回る者もいる。

“跳馬”開始から30分位で最高潮に達し、双方が接近し、相互に肩に手をかけておじぎする形の踊りとなる。このクライマックスの観客の反応は、馬が交尾する姿と見ているような声援ぶりだった。

その時“跳馬”では次の歌などが唱われる。

(主)外婆騎好馬^{※9}
恐怕闖到婆害羞
婆你騎馬騎好点
恐怕跌倒我害羞。

(客)本是真嘛 太咬！
太騎趕前我趕後
再見再見把手伸。

(主)婆你騎馬去干唄^{※9}
婆在馬背笑哈哈。
婆你騎馬騎好点
恐怕跌倒得滑踏。

(主)あなたのお馬はいいお馬
あなたにに向っていくのは恥しい
ねえ あなた 馬に乗る時は気をつけて
馬から落ちたら大変よ。

(客)ほんとうにそうですね あなた
あなたが前で 私はうしろ
いらっしゃい いらっしゃい 手を伸ばす

(主)あなたは馬で干唄へ
お馬の背なで アッハッハ
ねえ あなた 馬に乗る時は気をつけて
馬から落ちたら大変よ。

(客) 本是真嘛 太哎!
你一開榮華要高貴
你二開富貴要榮華
河東跑馬你趕前
你敲鑼打馬進朝廷。

(客) きっとそうなりますよ あなたん家^ち
榮耀榮華も意のままで
金にも地位にも恵まれる
川辺の競馬も一等で
ドラに送られ役所入り。

※8 「再見」はここでは、よくいらっしやいましたの意。

※9 「外婆騎好馬」。時として客人側も藁馬持参で来る場合がある。

(主) 外婆来到对門村
十個座門九個站^{※10}
今天外婆来把馬拉
發火炖魚正火熱。

(主) あなたが向いの村からおいでになる
椅子も揃わぬあばらやへ
わざわざ馬引き おでました
魚を煮こんで ご馳走しましょう。

(主) 外婆来到大坡前
下雪下冰你曾摸夜
化開冰雪慢慢走
慢慢走来慢慢歇。
本是真嘛 婆哎!
你化開冰雪慢慢走
慢慢走来慢慢游。

(主) あなたがわたしの村へおいでになる
雪降り積もるこの夜更け
氷砕き 雪を払って 遠い道
歩いてはまた休み お疲れだったでしょう。
本当にそうです ねえ あなた
氷砕き 雪を払って 遠い道
一步一步開いてやってくる。

※10 「十個座門九個站」は10人は座れるが9人は椅子がないために立っていなければならない意味で、貧窮を示す。

午後6時半頃、次の歌をもって“跳馬”は終わった。

“跳馬”を終え、宴席に客もそろったから「対歌」に移ろうという歌

(客) 就是難走也要来
一跛走来一跛傷
一跛摔来一跛走
哪曉走到哪年村。

(客) どんなに辛くても きっと来る
もんどりうって転んでも
傷だらけでも起き上り
いつまでかかっても たどりつく。

(主) 従来外婆没上当^{※11}
這回上当不忍心
本是真嘛! 婆哎!
従来外婆没上当
這回上当到我家。

(主) これまで あなたは 正直で
今度も騙すのではありません
ほんとにそうです ねえ あなた
これまで誰も騙さない
さあ家に着きました 本当です。

※11 「上当」; だまされる意。

(4) 「対歌」

午後6時40分，“跳馬”で向い合った双方は、今度は陸家の客間（横一列に三室が並ぶ間どりの中央の部屋で「堂屋」とよばれる）に向い合って座る（写真6）。「対歌」が始まるのである。四角い机（八仙桌）が堂屋の正面入口の敷居をまたぐ形で置かれ、向い合って室内側が鳳山村、外側が妻の実家側となる（図3）。冷えるので炉に木炭を盛大におこす。

ここでも「迎客歌」「開口歌」から始まる。どちらも自己を卑下し、相手を賞めて先に歌ってくれという内容である。次に「酒歌」になり、段々歌い進んでいくと、若い時に歌った「花歌」の類の歌になる。花歌は男女が相逢う時の歌である。軽妙に冗談を言い合ったりする。

「対歌」は深更まで続く、そのうちに歌が品切れで出なくなったり、歌い出すまでに時間がかかったりする。すると罰杯で、卓上の盃を乾して、さらに歌い続けるのである。こういう所は、中国農村でよく見られる宴会で拳を打って（猜拳）罰杯を飲ませるのに似ている。猜拳は男性が打つが、その女性版といった感じで、「対歌」は音楽性（文学性）、娯楽性を併せもつといえる。



写真6 「対歌」、室内（手前）が主人側、外が客人側。

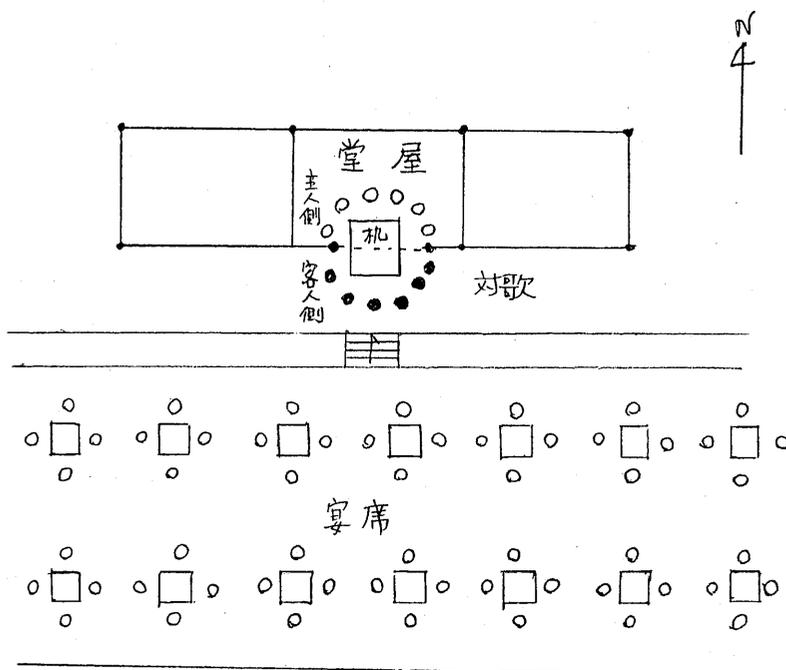


図3 対歌会場図



写真7 宴会。女性客が多い。

「対歌」を聞きながら、家屋より一段低くなった前庭で宴会が始まる（写真7）。宴席は机を囲んで四角く材木等で座席がしつらえてあり、ご馳走が出て賑やかだ。「対歌」というショウを着に飲み食いしている形である。宴席の客も女性が多かった。女性客が多いといっても、宴会のことを「吃満月酒」というくらいだから、酒も出る。酒宴の始まる前に必ず出るのが「甜酒粿」とよばれる糯米で作った甜酒で煮た甘い小団子である。

「対歌」の録音テープを、北京に住む麻江出身の苗族の苗謡語専門家（中央民族学院）に聞いてもらったが、聞きとれない部分があるという。東家人の方言らしい。以下も、「対歌」のそばで陳芳氏が漢訳してくれたもの及びその訳であ。

迎客歌（2）

我今天主家有喜酒	今日はお目出た、ふるまうお酒
我上西上来找你	わたしゃ西山へ お祝いに
你会鋼琴 ^{*1} 麼？	あなたは琴が弾けますか？
不会	弾けないよ
你会吹口琴 ^{*2} 麼？	あなたは口琴が弾けますか
不会	弾けないね
那麼你会什麼？	そんなら 何が出来なさる？
我只会谈愛情。	ただ愛情を語るだけ。

^{*1}鋼琴はピアノだが、少数民族は宴席でよく民族楽器の琴を弾く。

^{*2}口琴はハーモニカの意だが、「口琴」「口弦」などと呼ばれる竹製の小楽器がある。女性が多く弾く。

酒 歌（1）

一杯酒来滿々斟	さあどうぞ、なみなみ注いだ酒を手に
要唱乾隆馬再興 ^{*3}	乾隆の世の馬再興を唱って下さい
黄歴 ^{*4} 脚下書一本	古書の下に もう一冊
手掌黄歴訴苦情	祖先の苦難の歴史を語って下さい
虎過青山留脚印	虎は青山に足跡を留め
陽雀過路留声音	陽雀は過ぎし路に声を残す
客你情誼千年在	馬も鞍つきで売られるではありませんか
賣馬留鞍客留名。	どうぞ お客你 その友情と あなたのお名前を永遠に残して下さい。

^{*3}馬再興は人物名。

^{*4}黄歴は古い歴史書。

開口歌

春天桃花滿樹紅
十處吃酒九處逢
有緣千里來相會
無緣對面不相逢

講到唱歌我不會
難得三親大戚陪
從小從細不會唱
要是會唱不推杯

小小公鷄才開聲
哪會吹出鳳凰音
今晚聽說歌師到
嚇得我們顫驚驚

梔子花開葉子青
水流東海綠茵茵
拿根板凳請客座
請客座下好開聲。

酒 歌 (2)

太你來到凳門坡
我在家中轉嘍嘍
我趕後園討^{※5}把菜
有油無油鬧乾鍋

太你來到我害羞
殺個鷄仔像斑鳩
跑趕後園討把菜
擺在席上也害羞

※5 討は摘む意。

春は桃の木みごとに咲いて
あそこもここもお酒盛り
遠くの友とまた会えた
縁がなければ会えない

そろそろ歌の出番だが
子どもの頃から歌がへた
みんなの前で歌えない
歌えるものなら歌うのに

雄鷄はチビでも時を告げる
ましてあなたは鳳凰です
みんな身震いして聞きいるでしょう
さあ 今日は大歌手のお出ました!

山^{くちなし}梔子の花白く 緑に^は映え
海に続く水は清く流れています
さあ その椅子におかけになって
どうぞ歌の口火を切ってください。

おばあ様が向いの村からおでました。
私はうち中ウロウロし
裏の菜っ葉を炒めたら
油も引かず 大騒動

おばああなたが来られた さあ大変
鷄^{とり}をしめたが 見栄悪く
あわてて野菜を摘んできた
粗末なお膳で 恥しい。

花 歌^{※6}

(女) 没会唱歌不要来
你在你郷打草鞋
早上晚上一碗米
連湯連水夠你吃

(男) 没会唱歌也要来
死在你郷要你埋
拿你堂屋来打井^{※7}
拿你香火供靈牌

(女) 死在我郷我不慌
我一背背你奶路旁
早上晚上去挑水
一脚踩在你胸膛

(女) 歌えないなら 来なくていい
家で草鞋^{わらび}でも編んでいな
朝夕たった一杯の
お粥をすするがお似合いだ

(男) 歌えなくても 行きたいよ
そちらで死ねば 墓穴は
お前の家の座敷下
お前が手づから埋めてくれ
毎日香華 絶やさずに

(女) あんたが死んでも どったことない
お前を背^し負って捨てに行き
水を朝夕ぶっかけて
あんたの胸を踏んづける。

※6花歌は男女が相遇う時の歌。相手の気を引くような機智に富む歌が多い。

※7打井は墓穴を掘る意

想表歌^{※8}

爬起老早懶拔鞋
走到後園望花開
一時想到哥模様
筷子連碗一塊丟

爬起老早懶梳頭
走到後園望石榴
一時想到哥模你
筷子連碗一塊丟。

おに 哥を恋うる歌

夙^{つと}に起き出し 布鞋^{くつ}をはき
裏庭に出て花を見る
ふいに哥^{にい}さま想い出し
おもわず 碗箸とり落す

夙^{つと}に起き出し 髪をとき
裏庭に出れば 石榴^{ざくろ}の木
あゝ、哥^{にい}さまの顔想い出し
おもわず 碗箸とり落す。

※8「表」は表哥、(従兄)の意だが、男性一般をさす。

(5) 考 察

(一) “跳馬”の特色

以上から麻江の“跳馬”は(1)豊饒儀礼の性格を色濃く残した成育儀礼といえる。(2)それはまた、小島環禮氏らが主張する、古代ケルト人の馬に乗る豊饒女神エポナ信仰が中国に伝わり、その豊饒儀礼が行われた時は、かくの如きものではなかったかと思わせる要素を含んでおり、貴州東部及び湖南西部の苗族を中心とする少数民族の関連習俗の比較研究の必要を示唆している。(3)しかし“跳馬”を行う麻江農民には、“跳馬”は「一ヶ月の祝」を賑やかにする娯楽と意識されている。宗教職能者(巫師)の参加もなく、宗教的色彩も薄い。従って“跳馬”は芸能化の過程にある祭祀儀礼の一つといえるであろう。

(二) 古代的豊饒儀礼

“跳馬”は田んぼの中で性的ダンスを行う。農耕の儀礼は、大地の生産力を刺激するという意味で、性的な模擬所作を多く伴う。それは日本、中国、東南アジアの稲作地帯でひろく行われているものである。中国古代の性的模擬所作について白川静氏は『詩経』周頌「載芟(さいきん)」を引いて次のようにのべている。これは周の廟祭に用いる神穀の耕作を歌ったもので、その中の「思媚其婦、有依其士」は古代文字解読から「媚(なまめかしい)婦に、依たる(慕いよる)士(おとこ)あり」とよみ、それは稲魂を載いて性的ダンスをする男女の姿と考えるべきだろう。次句の「有略其耜、俶載南畝」はこの性的ダンスの後に、刃の鋭いすき(耜)ではじめて南畝に鍬入れが行われる様をのべたもので、紙篇のこの農耕古儀がすでに「振古(大昔)より茲(かく)の如し」と歌われているほど古いものだ^(註6)。とすれば、“跳馬”の田んぼの中の性的ダンスも古い農耕儀礼を継承したものということになる。

(三) 古代的共同体的紐帯

“跳馬”を含む「一ヶ月の祝」が古儀のおもかげを伝えていることは、これを漢族の現在の誕生一ヶ月(満月)の祝と比較すると、さらに明らかになる。漢族の満月の祝はその家(一族)の祝いという性格が強い。特に男子の第一子の場合、その子とその家を継承していく者であることを親戚を含め一族に承認させる儀式という意味を持っている。これに対し麻江苗族(東家人)の「一ヶ月の祝」は、親戚だけでなく村人(共同体員)全員が新しい共同体メンバーの参加を承認し歓迎するという性格が強い。鳳山村の婦人たちが二日間にわたる「一ヶ月の祝」を、無料で、しかも陸家の実家の親戚の宿まで提供して行うということが、それを示している。中国では古代社会崩壊の後、西周期にはすでに宗法制とよばれる親族法が成立していた。いわゆる宗族社会の成立である。これに対し、ミャオ(苗)など西南地区の少数民族の家族は、最近まで結婚しても、夫は妻の実家に住んだり或は通ったりして、子どもが生まれてはじめて夫の家に入るのが普通だった。「坐家」とよばれる)こういう社会では、子どもは夫と妻の家を結びつけ、その誕生祝いは両家共通の慶事となる。また家の束縛の弱い分、村(共同体)全体の慶事にもなりやすいのだろう。

(四) イニシエーション (加入儀礼)

両家の親戚のみならず、村の殆どが参加し二日間も祝い、また参加者の圧倒的部分が女性であるというのは、「一ヶ月の祝」が単なる慶祝以上に大きな意味を持つからであろう。

漢族社会では成育儀礼は、「家」の新成員加入祝賀式の性格を持った。苗族(東家人)社会では、「共同体」新成員加入儀式の性格を持つ。つまりイニシエーション(加入儀礼)の意味が強いのである。そう考えると、「一ヶ月の祝」を女性だけでとり行い、男性が加わらない意味も解けてくる。少年から大人の世界へというイニシエーション(加入儀礼)では、その儀礼を実修するメイズハウス等の機関があり、少年たちはそこに隔離される。この機関はたいてい秘密結社的な、特に異性に対して厳重に隔離されたものであった。麻江県杏山鎮鳳山村の場合、女性の実修機関の伝統が残っていたのではないか。だから女性の手で、共同体新成員である誕生満一ヶ月を迎えた子どもの吃満月酒がとり行われ、それが村(共同体)の了解事項になっているのであろう。女性のイニシエーション指導者なら、当然既婚者ということが必要条件になる。

(五) エポナ女神信仰の痕跡

“跳馬”が豊饒儀礼のきわめて古い形を残すものだとすると、この儀礼のシンボルである馬が問題を解く一つの鍵となる。

私は馬と結びついた中国の豊饒儀礼を寡聞にして知らない。河南省浚県の太任山の娘娘廟(現地では奶奶廟と呼ぶ)の縁日では、さまざまな形の黒色の馬の泥笛人形を売っていて、豊饒と授子祈願に来る農民がお土産に買って帰るのを知るくらいである^(註7)。牛と結びついた豊饒儀礼は存在する。「打春」或は「鞭春」といって、旧暦の立春の前日に、紙や粘土で作った牛を役所の前に置いて、紅緑の鞭で打ち豊饒を祈り、寒気を送る。この立春の儀式は古くからあって、宋の「東京夢華録」にも出ている。

石田英一郎氏は『河童駒曳考』で、古代原始神仰では牛が水神の聖獣或は水精であったものが、後に馬が進出することによって、牛にとって代るようになったと述べられる。西脇隆夫氏も、中国の馬にまつわる民俗を詳しく紹介されているが、馬をシンボルとする豊饒儀礼の例は出てこない。ただ中国に「龍馬伝説」が多いのは、スキタイの空を駆ける天馬思想の影響であろうとのべられている^(註8)。旱害水害などの危機儀礼の時は、多く龍神が登場する。ということは、馬→水馬(龍馬)→龍という形で馬は龍に吸収され姿を消したのではないか。

ただ、以上は漢族社会に特徴的なのであって、少数民族社会の民俗には、古代中原文化を忠実に伝えているものが多いと再評価されつつある現状なので、麻江“跳馬”も漢族社会では姿を消した、牛から馬に移行した時代の「水神の聖神或は水精」のおもかげを残すものかもしれない。

小島瓊禮氏の説と“跳馬”を結びつけるもう一つの鍵は、女神信仰であろう。

私は小島氏の説は、中国の豊饒女神信仰の形成に、ケルト人の馬に乗る豊饒女神エポナの信仰が影響あったと理解する。中国にも西王母信仰など多くの女神信仰がある。多くは授子や子どもの成育に効顕ある神とされているが、古くは豊饒女神であったことは間違いない。

エポナ女神信仰の中国伝播に接近する糸口は幾つかあると思われる。一つはエポナ像から迫る



図4 エポナ神像 オーストリア フォーアアルルベルク州 ブレーゲンツ出土 レリーフ模写 John Arnott Macculloch : *Celtic, The Mythology of All Races*. vol. III New York 1964 小島嬰禮編著「人・他界・馬」P155

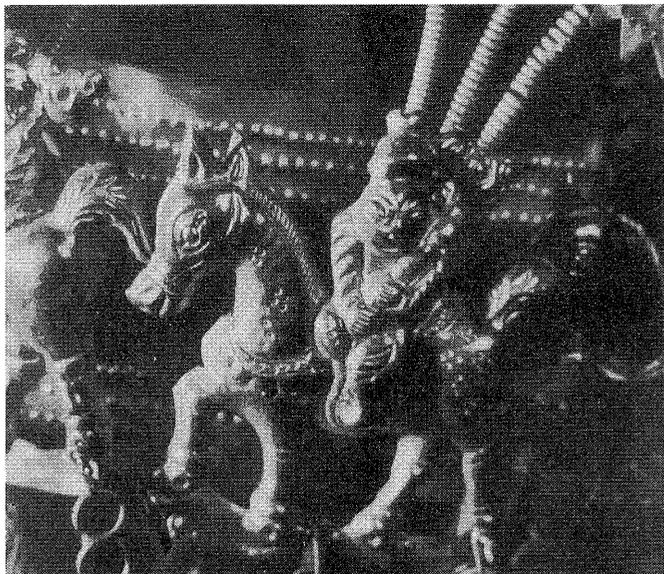


写真8 苗族女性の銀の首飾の様。馬に横坐りに乗った女が赤ん坊を抱いている。

方法である。

エポナ女神像は馬に横向きに座り、手に豊饒の角や盃や果物を持つという(図4)。(写真8)は黔東南自治州に多く見られる苗族女性の首から吊る銀の首飾り図の一部で、馬に横向きに座った女が子どもを抱いている。この図柄は、端午節に女の子が身につける荷包(邪を祓う意味を持つ匂い袋)の刺繍図案などにもよく用いられている。中国で、女神が横向きに座って子どもを抱く姿といえば、それは「麒麟送子」であろう(図5)。ただし馬でなく麒麟に乗っている。蓮



図5 麒麟送子図(陕西省鳳翔県・木版年画)

の実や笙を持つ図もある。蓮は「蓮生貴子」から来ていて、仏教の化生と関係があり、笙は生に通じる^(註9)。麒麟に乗るこの女神は、西王母（王母娘娘）とも東岳泰山天仙玉女碧霞元君（泰山娘娘）ともいわれている。いずれも授子、子どもの成育と関係ある神で、新中国成立まで、娘娘廟では「拴娃娃^(註10)」習俗が盛んであった。麒麟送子図が漢民族に好まれよく用いられるのは、女神の連れてくる子は非凡な子で、科挙に合格し、一家一族に富貴をもたらすとされたからである。こういう考え方の基礎に、世の常ならぬ天成の異才は人間凡俗の女からは生れないという古信仰があり、そこから神婚譚、幽婚譚、異類交婚譚が数多く生まれた^(註11)。富貴をもたらす非凡な子を連れてくる女神の乗り物ならば、馬より聖獣麒麟の方が似つかわしいというので、馬にとって代ったと考え、水神の聖獣なら馬より龍馬が似つかわしいと天馬思想に結びつけられていったのと軌をいつにする。

苗族の娘を飾る銀の胸飾りに彫られた、馬に横向きに座り、子どもを抱く女性についてはよく分らない。苗族民話の研究、湘西古丈県土家跳馬隊の巫師が、授子祈願などで如何なる神を降臨させるのか等を調べるのが手懸りとなるであろう。

（六）芸能化しつつある儀礼

“跳馬”を含む成育儀礼「一ヶ月の祝」が、古代的なものを色濃く残しているにも関わらず、他方それを行う鳳山村々民の意識は現代化されていて、その乖離が目立っている。“跳馬”は民間芸能化されつつある儀礼であるとも言える。村民の意識については先述したので、(4)「対歌」の歌を例に、対歌がどういう特徴を持っていて、どう変化しつつあるかからそれを見てみよう。

「想表歌」は、対歌が古い歌謡の伝統を継承するものであることをよく示している。裏庭の美しい花、実ったザクロという植物の盛りの姿に興を發し、恋しい人に思いが飛んでいく。次の「篋子連碗一塊丟」の碗や箸は、苗族の愛情表現によく使われる小道具である。例えば「歌垣」（遊方）に出かけたり、逢引きで日暮になったりする時は、場所が山中であるから食事が問題になる。その時、苗族の若い娘はごちそうを作って籠に入れ、持って行って男に食べさせる。男は食べ終ると箸を一本落とす。こうすると二人がまた永く相逢えるという言葉、伝えがあるからだ^(註12)、この習俗も古いものを感じさせる。「酒歌」では一番と二番に「我趕後園討把菜」という句がある。裏の菜園で菜葉を摘んでくるという意味だが、この歌はこの句が定型になっていて、前後の歌詞はこれを生かすために創作された節がある。白川静氏は詩篇「国風」の中に草摘みや「采薪（さいしん）」が多いことを指摘される^(註13)。例えば草摘みは「招魂」と関係のある俗であった。そういう民俗の意味する所が分からなくなって、菜葉を摘むとなったのであろう。対歌はこういう定型の句を生かして、しかも前後の歌詞を作りかえて、人の意表をつく歌にする面白さを追求する歌あそびになっているようだ。夜を徹して延々と続く対歌を肴に、宴会がやられるのは、現在も青年たちの結婚相手捜しの場として「歌垣」が行われ、そこでは対歌が重要な手段として生きているからであろう。

「迎客歌(2)」は門付けの祝い歌的ものを残している。「開口歌」なども、相手を誇大に誇め上げ、自らを卑下するが、これも祝い歌の特長である。かつての祝頌歌の流れを汲む歌が、遊芸者など

に歌い継がれていった伝統を対歌は残しているようである。

このように歌詞の面白さに重点があり、それが大衆化され、歌合戦に使われるようになったためか、曲は大へん単調である。基本的には(図2)の一曲で歌われている。ただし数時間のテープを聞いた採譜者は、曲の一部に三つの変調があったという。

(七) おわりに

少数民族文化の研究は、基本的にはその民族の言語をもとにすべきであるが、筆者にはその能力がなく、漢訳に頼らざるを得なかった。研究過程で苗語専門家から聞いた話だと、麻江附近の苗語の中には、死者を送る言葉或は逢引きに出かける者を指す言葉に、何故か馬のつく語が多くみられ、蚕も「虫」と「姐」の語が組み合わさっているというから、「馬頭娘」説話を連想させるなど興味深かった。その民族の言語の民俗語彙を集めると、新しい発見があるようにも思われる。

最後に調査中にも感じたのだが、中国の改革・開放政策、つまり資本主義的市場経済の導入が、少数民族地区でも奔流の如く進んでいた。他方“跳馬”ははじめ古い文化はどんどん失われつつある。一番大切なのは中国人研究者による地に足のついた研究であろう。今回の調査では“跳馬”を紹介して下さり、村人への質問や対歌の漢訳をして下さった陳芳氏、ご教示下さった中央民族学院の陶立璠氏(民俗学)、李炳澤氏(苗語)、伍隆萱氏、対歌の採譜をして下さった柯琳氏(民族音楽)ははじめ多くの方のご協力を得た。紙上を借りて厚く御礼申上げる。引き続き相互に協力し、研究が進むことを希望している。

(1993年5月17日)

(注)

(註1)「跳馬舞」という民間舞踊が新疆省ハザク(哈薩克)族に伝わっている。踊り手はトンプラ(冬布拉)という楽器を弾きながら、牧場を舞台に奔馬そのままに活発に舞う。これと区別するために、ここでは現地の人の呼称の通り“跳馬”とした。

(註2)小島瓊禮編著《人・世界・馬をめぐる民俗自然誌》(東京美術・1991)

(註3)報告者は民族教育雑誌社の伍隆萱氏で貴州省都勻県出身のプイ(布衣)族。

(註4)古丈県跳馬隊の説明は以下の通り。

「湖南省湘西苗族土家族自治州古丈県境内的“跳馬”，以酬神還愿，祭祖祈福為目的，是当地調年中最高興的慶典。它包括：敬神許馬，操旗，出馬，賀馬，跳馬，稀可樂和燒馬祭神等項内容。」

(註5)1982年の第3次全国人口調査で、法定の少数民族は55と認定された。民族識別は言語、習慣や地域等民族学的分類に基づくが、実際の認定に当ってはその民族の大多数の意見を尊重するやり方をとってきたというが、中共11届3中全会時(1978年)に民族識別が確定しなかった集団は、貴州省だけで東家族、西家族、偉家族、蔡家族、龍家族、繞家族など23集団あった。1982年、うち3集団が漢族、残り20集団は9少数民族中に帰属されることになった。《民族学概論》(中央民族学院出

版社・1989)

(註6) 白川静著《中国古代の民俗》(講談社・1980)

(註7) この馬の泥笛人形は黒くて「泥咕咕(ニークークー)」とよばれている。地元では隋末の農民戦争戦死者を葬う時、副葬品が足りなくて土を焼いて作ったものが起源とされているが、この由来譚では、何故馬の人形かという説明になっていない。

(註8) 小島嬰禮編著《前掲書》

(註9) 張道一《麒麟送子考析》(張道一廉曉春著「美在民間」北京工芸美術出版・1987)

(註10) 拴娃娃の拴は紐をまきつける意で、娃娃(人形)の首に赤い紐を結んで、この人形を娘娘神と授子祈願者と結び仲介物として神前に供え、願望が達せられるよう祈願する授子習俗。

(註11) 澤田瑞穂《神女送子のこと》(澤田瑞穂著「中国の民間信仰」・1982)

(註12) 《贵州省清水江流域部分地区苗族的婚姻(貴州・湖南少数民族社会歴史調査資料之三)》(全国人民代表大会民族委員会弁公室編・1958・11)

(註13) 白川静著《前掲書》

新刊紹介

賈蕙萱 沈仁安 主編

『中日民俗的异同和交流中日民俗比較研究學術討論會論文集』

本書は1991年3月に北京大学日本研究センターの主催によって開かれた討論会の報告である。日本側7編、中国側28編の論文と、日本側3名、中国側5名の研究者による座談会の記録を収録している。

日本側の論文では、日中民間説話の比較研究(野村純一)、稻荷信仰(宮本袈婆雄)、人形道祖神論(神野善治)といった各々の蓄積のある分野において日中の比較にふみ込んだ見解を述べている。あるいは彝族における現地調査や同じく貴州省の仮面劇の調査をふまえた、伊藤清司、広田律子氏の論文が収録されている。

中国側では先年亡くなった張紫農氏の「沖縄と中国南方の若干の習俗の比較」で、沖縄の家族制度、葬制、墓制、食生活、年中行事、産育儀礼などに注目すべき事象の多いことを述べた後、中国南方との関連で風水、亀甲墓、産育に頁をさいてその相似を論じている。史麗華氏は「中日伝統行事の比較」のなかでまず正月行事

について『荆楚歳時記』『楚梁録』などの記載と日本の習慣とを比較することによって、中国の影響とくに古代のそれによって形成されたものであると論じているほか、3月3日、5月5日について検討している。このほか「福」の概念を検討して日中の福神を比較した宋成有氏の「日中民間福神の比較」、邪を払い災害を避ける桃の呪力に対する信仰を扱った論文、日中の漁民の民間信仰の比較、『漢書・地理志』、『楚辞』、『荆楚歳時記』などによる荆楚の巫俗と日本の古代との比較研究など多岐にわたる日中の比較民俗関連の研究が収められている。10数頁ほどの短かいものが多く、脚註も割愛されているようであるが、中国側からみた日中の比較の方向性をうかがうことができる論文集である。

(古家 信平)

A5判 429頁 北京大学出版社
1993年4月刊 8.9元